

文化

自身の体験がある。夫・裕之の母が戦前台湾に住んでいたとき、私の母と女学校の同級生だったのが縁で私たちは国際結婚。1977年、私は生まれ育った台湾を後にして、日本にやってきた。

ホステスが4人自殺するという事件が起きる。相談する相手がいたら彼女たちは助かっていたかもしれない。そのときに思いついたのが、台湾でソーシャルワーカーをしてきたときにかかわった電話

話による悩み相談「いのちの電話」。世界的に展開されているこの活動は、台湾では「生命線」と呼ばれていた。

鍋大会に700人集合 92年から「お月見大会」や「水餃子・火鍋大会」を催すようになったのは、月餅、ピーマン、お生からが多かった。それまで母国語で悩みを打ち明けられる機会があまりなかったからだろう。勉強の合間のアルバイトだけでは生活が厳しい、なかなか友人がでえずにひとりぼっちで寂しいといった声が寄せられた。

もともと大規模なのが、旧暦の大みそかに開く水餃子・火鍋大会。大阪・梅田の廃校となった小学校で開いたときには700人が集まった。ボランティアの人々とともに、引っ張り出してきた卓球台の上で、餃子を3000個つくった。お月見大会、鍋大会ともに今年で19回を数える。

講習会ではタコやカニの形をしたワインナーン1センチの作り方やウサギに見立てたリングの切り方、おにぎりの握り方などを、講師に教えてもらった。96年には日本語、中国語、英語でお弁当の作り方を紹介した本も出版した。

0件ほどあった電話相談は、近年は400件前後に減っている。これは我々以外にも外国人向けの相談窓口ができた結果だと思ふ。増えているのは国際結婚をした女性あるいは男性からの電話だ。夫婦両方から話を聞くことも多い。

言葉通じず寂しさ募る すぐに子宝に恵まれたが、当時は日本語がほとんど話せなかったため、産婦人科でも意思疎通がままならない。歯がゆさと寂しさが募った。周囲の助けもあって何とか乗り越えることができたが、言葉の通じない異国の地で暮らす大変さを痛感した。

滞日外国人向けに20年、交流会・講習会も開催

協力、そして夫の勤務先である大手企業の労働組合の資金提供によって、関西生命線は生まれた。当初は電話も労組内に置かせてもらっていたが、お互いの理念に隔たりがあったため、1年後に独立。運営費用は個人および法人の寄付でまかなうようになった。

お月見大会は旧暦の中秋の名月に大阪城公園で開いている。ふるまつの

「外国人向けのお弁当講習会」は、「お弁当作りが難しい」という電話相談から生まれた。私自身、娘2人が中高生だったとき、お弁当作りに苦労したため、気持ちはよくわかった。台湾にもお弁当はあるが、日本のようにカラフルではない。娘からは「茶色い弁当はやめてほしい」と言われたものだ。

20年間続けてこられたのは、私といっしょに相談員をしてきているボランティア、様々な催しを手伝ってくれるボランティア、そして寄付会員の方々のおかげだ。今後もし日本に住む台湾・中国出身の人々にとって、ひと息つける存在であり続けたい。(いとう・みどり 関西生命線代表)

中国語的救済的電話相談

滞日外国人向けに20年、交流会・講習会も開催

伊藤 みどり



「ニイハオ(こんにちは)」。大阪市のマンションの一角。専用電話にかけてきた相手に対して私はそう話しかける。電話の向こうにいるのは、何らかの悩みを抱えた日本在住の台湾・中国人。こうした台湾・北京語で電話相談を受け付ける「関西生命線」(電06・6441・9595、火・木・土曜午前10時〜午後7時)を開設して今年で20年になる。

関西生命線が生まれた背景には、台湾出身の私



「外国人向けのお弁当講習会」ではおにぎりの握り方などを教えた(6月、大阪市のクレオ大阪西)

88年、大阪で台湾人